

3万人以上の人々が自殺している今日、「人間の生命は地球よりも重い」と言われることが空しく感じるこのごろです。事情はいろいろあると推し量られますが、私達の生命は、自分の生命でもありますが、自分自身だけの生命ではないと思います。

ある山間に何百年と続いている火があることを誇りにしている家があります。何代もの家族が毎日毎日囲炉裏の火を大切にしてきた歴史でもあります。囲炉裏の火を見つめながら、お祖母さんが孫達に昔話を語り、それを目を輝かせながら、お祖母さんの膝に小さな手を置き、また風の音を気にしながらお祖母さんに身をすり寄せたり、ある寒い冬には囲炉裏に背を向けて暖まっていると、お祖父さんやお父さんに飛び上がらんばかりに叱られたり、火の番を忘れ遊びにいつてしまい、きついげんこつをいただいたり、足を乗せる台木にそっと足を置いてほくそ笑んでいる時、足音にうろたえ、立ち上がったらお母さんだとわかり、きまりの悪げに母の顔を覗いて、母の笑みでホッとしたり、囲炉裏を囲んだ様々な事が浮かんできます。それこそ幼い頃から火の怖さ、暖かな火、一つの火でしかないのに、様々な火。一つの火なのに、家族が集い、食事しつつ、箸の持ち方を叱られ、虹になった火を見つめ、喉につかえながら箸を運ぶ、何人もの様々な火があります。

今の私達は、テレビに汚染され、画面に表れる家庭が理想とし、家族を眺め一人ひとりの顔色や目の表情を観なくなっていることに、私自身も思い当たる場所があります。一人の生命の足掻きの表情に対して無感覚になっている。一人の生命がどんなに悩み心を痛めているか、表情を見過ごしている。自分自身の悩みをじっと胸に止めて、自らの問題と向き合う姿勢が持ち続けられない。早く早くと解決を急ぐ。自分自身と向き合い、生命の意味を問い続けていくことの大切さが人間の誇りになると私は思います。